

# 死をめぐる凶像表現

「Cimiteri Monumentali<記念碑墓地>」の巡礼旅



ヨーロッパ・地中海文化コース(山田ゼミ)

井上千尋

## 日程

出発日	2012年 2月 3日	旅行日数
帰着日	2012年 2月 17日	15日間
	滞在地	行動・調査内容
第1日目	アムステルダム	乗換便欠航のため空港泊
第2日目	ミラノ	ミラノ着
第3日目	ミラノ	ミラノ・記念碑墓地調査
第4日目	フィレンツェ	ポルテ・サンテ墓地調査
第5日目	フィレンツェ	ポルテ・サンテ墓地等調査
第6日目	ピサ	カンポサント調査
第7日目	ローマ	ウルバーノ墓地調査
第8日目	ローマ	ウルバーノ墓地調査
第9日目	ローマ	ウルバーノ墓地調査
第10日目	ローマ	ピラミデ、外国人墓地調査
第11日目	ローマ	タルクィニアのネクロポリス調査
第12日目	ローマ	チェルベーテリのネクロポリス調査
第13日目	ローマ	アツピア街道沿いの霊廟の調査
第14日目	ローマ→福岡	
第15日目		

## 目的

人は誰も死の時を迎え、そして墓に眠る。だから墓は死のシンボルなのだが、同時に人が生きた確かな記憶でもある。人は墓の前に立ち、愛する人の死を悼み、また自分の死の時を想起するが、同時に人は自分の死の時までの生への思いを「死者」に誓い、報告する。墓は生と死の狭間に立つ記念碑(monumento)であり、墓地は生と死という人間本来の「出来事」を想起させる大切な空間なのだ。

人類の歴史の中で、さまざまな民族や宗教が多様な葬礼文化を生み出してきた。だから墓や墓地の形態やスタイルといった具体的表現方法もさまざまだ。イタリア半島でも、古代エトルリア人などの諸民族が住んだ頃から墓地は様々に変容を遂げながら存在してきた。時にはギリシャ的影響を受けたネクロポリス(死者の都市)として。時にはキリスト教徒によって使用されたカタコンベ(地下共同墓地)として。また時には、身分や宗教を一切排除した「死者の貯蔵庫」として。そして18世紀後半から19世紀、「表現の場」としての墓地、すなわち「Cimiteri Monumentali(記念碑墓地)」が出現する。

現代の日本社会において墓地というと概して暗くて陰気で、同じ形の墓がずらりと単調に並んだ殺風景な様子が想起される。しかしイタリアの Cimiteri Monumantali(記念碑墓地)では大理石やブロンズの彫刻が所狭しと立ち並び、まさに芸術性の高い「作品」で溢れた独特な形で墓が自己主張している。そこで表現されているものは何か。一言でいってしまえばそれは確かに死であるのだが、そ

れはどのような「死のあり方」を語っているのだろうか。ただただ死者を悼む「悲嘆の死」だろうか、それとも思う存分人生を謳歌し、誇りのうちに生を終えた死者の「喜びと称賛の死」だろうか。イタリア各地に残る大胆な芸術表現が許された記念碑墓地の「死の図像表現」を訪ね歩きながら、多様な死の「あり方」やイメージを拾い集めること、そしてそこからイタリア人独自の死生観・他界観をつかむこと、それがこの研究旅行の目的である。

## 報告

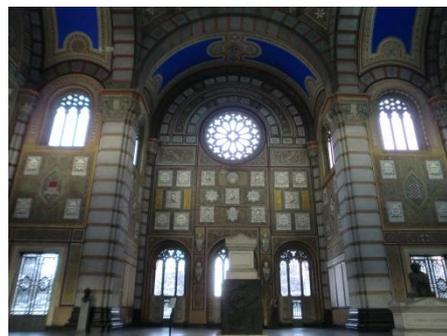
今回、15日間でミラノ、フィレンツェ、ローマの3か所の記念碑墓地を訪れた。

### ミラノ・モヌメンターレ墓地

建築家カルロ・マチャキーニによって設計され、1866年から埋葬が始まった。広さは約25万平方メートル。墓の写真と製作者の名前が記された地図があったり、モヌメンターレ墓地ができるまでを説明したパネルが展示してあったりと、ミラノの墓地に対するオープンな姿勢が感じられた。埋葬開始から11年後、1877年に完成した正面の建物から左右両方向に回廊がのびており、ミラノで活躍した著名人の墓や、富裕層の墓が収められている。左右の回廊では、通路ではなく墓地正面の広場に向けられて墓が作られており、墓が広場を見下ろすつくりになっている。墓地の大部分を占める野外部分には、庶民向けの棺を積み重ねた墓から、大規模な教会や家のような墓まである。全体的にキリスト教的なテーマのものが多くみられ、最近では墓参り目的ではなく彫刻を見にくる人も多いという。



ミラノ・モヌメンターレ墓地正面



正面の建物の内部



庶民向けの墓

ここでは4段の棺が積み重ねられて  
墓地と外を区切っていた



棺の内部



大規模な墓

## ポルテ・サンテ墓地(フィレンツェ)



フィレンツェのモニュメンターレ墓地(ポルテ・サンテ墓地)は、ミケランジェロ広場のさらに高台、サン・ミニアート・アル・モンテ教会の裏側に位置する。高台にあることで、墓地から市街地を見下ろせる。元々城塞があった場所に建てられているため、角が多く、記念碑墓地の特徴ともいえる回廊部分が存在しない。ミラノやローマと比較して詩や、文章が刻まれた墓が多くみられ、墓地内は整備されており、墓の間の通路は砂利が敷き詰められていた。内部は静まりかえっており30分ごとに響くサン・ミニアート・アル・モンテ教会の鐘の音だけが響いていた。2日間調査したが、一度も人に会うことはなかった。

## ヴェラーノ墓地(ローマ)

ローマがナポレオンにより占領されフランス領になり、都市の城壁内に死体を埋葬することを禁止した「サン・クロード法」が適用されたことによって、墓地建設が発案された。ローマ大学の裏側に位置し、赤茶色(煉瓦)と白(白大理石)で作られた入り口には、「瞑想・希望・慈愛・沈黙」を擬人化した4体の女性の像が置かれている。墓地前の広場には至る所に色鮮やかな花や、レモンの木、トマトを売る花屋が並んでいた。広大な墓地の敷地内は車が通れるようになっており、墓地内の教会に、霊柩車で木製の棺を運び込む様子を見ることができた。他地域の墓地と比較して、圧倒的に故人の肖像や写真をはめ込んだ墓が多くみられた。



墓地内の教会に棺を運ぶ霊柩車



にぎやかな墓地前の花屋



肖像画をはめ込んだ墓

記念碑墓地で多く見られたテーマ

生前の偉業や職業



ピエトロ・ラツァティの墓

医師としてイタリア独立戦争の際に活躍し、のちに産業医となったラツァティの墓は、胸像の下に生前の様子を描くことで故人について知ることができる。



海軍の提督であったシモ-ネ・パコレットの墓には、故人の像とともに船をイメージした碇やラットが彫られている。



キリスト教的なもの



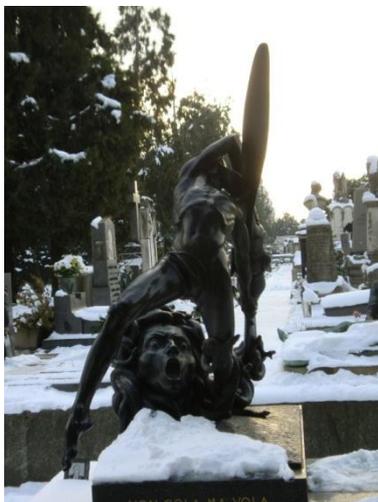


聖書のなかの最後の晩餐を再現した墓



キリストがゴルゴダの丘まで歩き  
十字架にかけられる様子が表現されている

## 死への恐怖



空軍のパイロットであったウンベルト・ファベの墓。  
飛行機のプロペラを背負った男のブロンズ彫刻の足元に、  
死を連想させる「メドゥーサの蛇」を絡み付かせることで、強  
く死の恐ろしさを表現している。



## 死後の幸福

マツオーネ家の墓



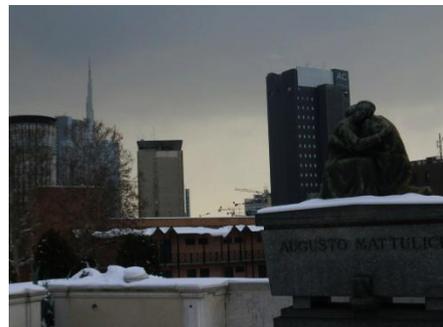
ドレス姿の女性と軍服を着た男性が手を取り合っている。2人は兄妹である。第二次世界大戦中、空軍の無線技士として戦死した兄マリオと、兄の翌年亡くなった、妹マリアのために、彼らの両親によって作られた。残されたものが故人の死後の幸福な姿を刻むことで、生きる糧にした様子が読み取れる。



幼くして亡くなった子どもの墓。特に子どもの墓は、たびたび手に花を持った様子で描かれ、あたかも花を摘みにいったかのようなようである。

### 研究旅行の感想

この15日間、何度も墓地で迷いました。じわじわ曲がっていく通路、回り道を余儀なくされる、道の真ん中のモニュメント。複雑に絡まった墓地で何度も途方に暮れました。しかしその経験を通して、イタリア人の墓地に込めた意味をほんの少し理解できた15日間でもありました。故意に複雑にし、回り道をさせることで、目的以外の墓を見る機会を作る。そうして、時に芸術作品を通して象徴的に、時に写真や文字を通してダイレクトに、通る者に人生について問いかける。イタリア人にとって墓地は、故人に祈りを捧げるだけではなく、死者という師から人生について学ぶ場でもあることを感じました。これは、写真からでは感じ取ることができないことであり、このような貴重な機会を与えてくださった国際文化学部の先生方に感謝いたします。ありがとうございました。



夕暮れのミラノ・モヌメンターレ墓地

### 参考文献

『イタリアの記念碑墓地—その歴史と芸術—』 竹山博英著 言叢社 2007年